

## 長崎の南蛮貿易と末次興善久四郎

松澤 君代

日本側資料において「末次興善は長崎の興善町を拓いた博多商人で長崎代官末次平蔵政直(次男)の父である。興善の父は末次左馬頭といいた内氏の重臣杉興連の麾下で身分は士分であったが勘合貿易に関する仕事をしていたと言う。」この程度しか知る事がない。しかし、フロイスの『日本史』の中に興善の人物像が記録されている事を知った。

それには、「永禄八年(一五六五)ルイス・デ・アルメイダが堺の日比屋了慶屋敷で病に伏せた時何くれとなく我々の用事を世話してくれる男で、コスメ・コーゼンという富裕でたいそう善良なキリシタンがいた」と記されている。また、日比屋了慶がアルメイダを茶湯に招待した時にもコスメ・コーゼンは同伴している。(アルメイダ・『茶会記』ここに現れるアルメイダは永禄十年(一五六七)にはトールレス神父の要請により、堺より九州に帰り、長崎にてキリスト教を伝導した修道士で、この時の長崎の町とは城の古趾の麓、現在の桜馬場町から夫婦川町あたりのことである。

末次興善がアルメイダやフロイスに同行していることを考えると、当時彼は日本側イエズス会の会計係兼雑務係をしていたと思われる。又、コスメという洗礼名はコスメ・デ・トールレス神父より授かったといわれている。そこで、私は、末次興善が訪れたという堺の日比屋了慶屋敷跡を訪ねることにした。



末次興善久四郎の墓  
(博多 妙楽寺)

日比屋家はザビエルが堺を訪れた際の宿泊場所である。(当時の日比屋家の当主は了慶の父であった。)現在この屋敷跡はザビエル公園となっている。近くには、小西行長、千利休、武野紹鷗、納屋(ルソン)助左衛門、西ルイス(大村く

天正六年(一五七八)博多の町が戦乱で混乱状態になった時、博多在住のパードレ達を救ったのは興善であった。それ以外に、興善、ヤコブ善人(養子)父子が秋月の教会で福祉事業におしめない支援をしたことや、博多の教会建設費用を提供したこと等も『イエズス会日本書簡』は伝えている。

このように興善はイエズス会宣教師と交流を持つことにより、長崎開港から早い時期に長崎入りしたと思われる。元龜二年(一五七二)から約70年間長崎の町は南蛮貿易で栄えたのであるが、末次興善のようにキリシタンでないと南蛮貿易には携わる事が出来なかつたようだ。言い換えれば、長崎南蛮貿易は長崎が「日本のローマ」「小ローマ」と呼ばれる程キリシタン全盛期であつたといえる。

また当時の長崎商人は貿易に係る人々の宿主となり旅籠屋の役割も果たした。本博多町には博多から芸妓を呼び寄せて居住させている。そして、貿易商人や貿易船に乗ってやって来る人々のため「憩」場所を設けていたと言う。やがて鋳物師・鍛冶職人等も近くに移り住んで来た。

さて、「興善町」と現在まで町名として名を残すほどの興善であつたが、彼の晩年のことは未だわかつていない。彼の名がフロイスの『日本史』に登場した最後は天正十八年(一五九〇)巡察師ヴァリニャーノが天正遣欧少年使節に同行して豊臣秀吉に謁見するため上京。途中博多近くで待っていた興善が「宿泊は我が家で…」と申し出たが断つたと書いてある。

先日私は興善の墓があるという博多の妙楽寺に出掛けてみた。そこには、末次家類族の墓碑は全く無く、孝善(興善)が唯一人眠っていた。末次久四郎孝善の墓には戒名秋林道仲信士。寛永十四年丁丑歳八月十日逝去。と書かれていた。この墓の孝善と長崎の興善は同一人物であるという。そこで、この墓はいつ誰が建立したのか妙楽寺の御住職に尋ねてみたがわからないとの事だつた。孝善の墓碑の傍には秋月藩家老宮崎織部(松翁紹清居士)の墓があつた。霊友なのであろうか?ちなみに、末次家類族の墓は長崎春徳寺(平蔵系統)、京都建仁寺の両足院(三代平蔵)、秋月の長生寺(養子、ヤコブ善人系統)にもある。

出島を築造する際に出資した出島商人の中に末次宗徳(興善の長男)の名があると前述した。しかし、宗徳系統の墓は発見されていない。また、幕末後興善町の乙名で和蘭通詞で天文学者の末次忠助は末次家の末裔らしいが確認出来ない。今後の課題としたい。

(長崎歴史文化協合理事)

ずれゝ武士から商人になる事等そうそうたる人物の屋敷跡があり、歌人と謝野晶子はこのザビエル公園の近くで生れ育っている。末次興善が長崎へ進出する切っ掛けとなつたのは堺の町で「南蛮貿易港として、新しく長崎の町(建て)が始まる」という情報を得たからだと言われ、特にルイス・デ・アルメイダとは親しい間柄だつた。

興善が堺だけでなく豊後の大友氏ともかかわりがあつたことを示す出来事をイエズス会の書簡で知る事が出来た。それは、「コスメ・コーゼンが哀れな捨子(女の子)を野犬から救い、しばらく河内の三箇に預けていたがやがて引き取つて育てている。そして、その後その娘を大友宗麟に託すがその娘があまりにも熱心なキリシタンであつたので宗麟の息子義統によつて追放された」。次に間接的な話ではあるが長崎と関係ある事柄があるので記載する事とする。

博多豪商三傑の一人大賀宗久家と興善の長男宗得家とは縁組によつて強く結ばれている。大賀宗久は大友家に仕えていた時代には佐伯姓を名乗り、大友家が改易になった際に中津に移り商人となつている。その時は大神姓を名乗っていたが、その後大賀姓を名乗り剃髪して宗久と号するようになった。

それ以来中津藩の黒田官兵衛や長政父子と親密になり、やがて、長政の藩御用を受けるようになっていく。

大賀一族の大賀九右衛門や末次宗得は共に長崎出島築造の際の出資者25名に名を連ねている(『新長崎市史近代編』)長崎には博多と同じように、豊後からの移住者も多くいた。彼らのための豊後町は、興善町の近くにあつた。また対岸・洲村の庄家志賀家も豊後竹田から移住した氏族である。岡城主(竹田の旧名)であつたドン・パブロ志賀は熱心なキリシタンであつた。岡城は滝廉太郎の「荒城の月」で有名である。滝廉太郎もまた、キリシタンである。

### 風信

○二月三日は節分、四日は立春。然し「春とは名のみにて候」とある。

○寛政年間(一七九七)の『長崎歳時記 節分』をみると次のように記してある。家々鱧を刻み神棚、恵方棚外、浴室、雪隠に至るまで燈火をかかげ、黄昏には家内あかり全てを消し、豆はやしを始む。此夜第一の肴は紅大根を輪切りにし台にもり傍に塩をかき立ておく。

こよひ三味線太鼓笛にてはやし踊を仕立、へぎに塩と大根にて小鼠を作り、各家々を祝詞を述べて廻る。たわむれに姿をばし面をつけて祝う人あり。私の子供の時には節分の夜は、紅大根のほか金がしら(魚)と鯨の百ひろを縁起物としていた。

○我々子供の時には寒い古。稲荷修行という事があり、夜には弓帳灯籠を持つた男衆が「ヨッシン・ヨイサ」の掛声で愛宕山・若宮・彦山方面の「お稲荷さん」の狐にお供えを持って廻り、丸山方面では「コンカイ」の三味線供養があつた。

○一月十九日(月)十一時より本会では新年の集いをいたしました。篠原会長他宮川・松澤等各委員と会員、招待客として本協会事務所のある桶屋町の自治会長他、約五〇名の出席。今年度の開催予定行事について事務局より報告を中心に懇談、なごやかに午後一時解散。

○二月の本会の各講座は「古文書を読む会」以外は「冬休み」と致しましたが、三月より再開いたしますので御自由に御参加下さい。(会費不要)

一、**長崎学を学ぶ講座** 毎週月曜日午前十時半より、初回(二日)講師・荒濱茂氏(越前丸岡城について)。(資料代二〇〇円)

一、**古文書を読む会** 毎月第一・三火曜日午前十時半より(川原氏、米田氏指導。越中後見)

一、**水曜懇話会** 毎週水曜日午後一時半より(竹之下・江口・吉田・田村・野口他各氏を中心に)

一、**食文化を考えるサークル** 毎月第二・四金曜日午後二時より。(脇山壽子講師、太田靖彦氏他)

○一月には富山市の井村広隆様より「書架を整理していたら郷土長崎の本が出て来ました」と、多くの本を送つて下さつた。

『慶応長崎事件』(司馬遼太郎)、『長崎郷土物語』(歌川龍平)、『長崎出島』(平山蘆江)、『長崎幕末浪人伝』(深湯久)、『長崎出島の遊女』(白石広子)、『株式会社長崎出島』(赤瀬浩)他

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所 二F

